春の観光シーズンをむかえ、有明海を渡る航送船（フエリーボート）有明丸は、いまや人気の焦点です。そこで今度、熊本市砂取小学校六年の吉村暁君と三年の吉村保君に有明丸に便乗して貰いましたがその感想をスケツチと文でこゝに掲載することにしました。

フエリーボートにのつて

砂取小学校六年　吉村　暁

二月八日長洲港発三時四十分の航送船有明丸にのつた。ぼく達がみている間にバス、トラックオート三輪車単車など左右に分かれて次々に積みこまれて海の上をすべるように走つていつた。水平線の向うに雲仙岳が、ぼおつとかすんで見えた。始めは、すいていたが積みこまれていた車中の人達もおりてきて船内でテレビを見ている。

以前は熊本ー長崎間を荷物などを運ぶ場合トラックで福岡県から佐賀県を回つてゆかねばならなかつたそうだが、フエリーボートができてからこれを利用するようになつたので長洲港から多比良港まで四十五分間でいけるようになり、又かん光バスなども車も人も、もろとも積みこんでいつてくれるのでとても便利です。現在は一隻が運行されているそうですが、三月三日竣工から第三号船がふねが有明丸も動き始めるので二隻で往復するようになれば、ますます、利用する人もふえるだろうし、又一そう便利になるだろうと思いました。

この有明丸は、総トン四五〇トンという大きな船で、一日六往復し、大型バス八台、乗用車二台、又は六トン積みトラック十台、それに乗客三〇〇人をのせたまま、多比良ー長洲間をむすびます。

貨物をはこぶのに鳥栖回わりではトラックでは九時間、鉄道貨物では二日ー三日かかつていたのが、有明丸を利用すると、三時間半ぐらいに短縮され、けいひも非常に安くてすむそうです。

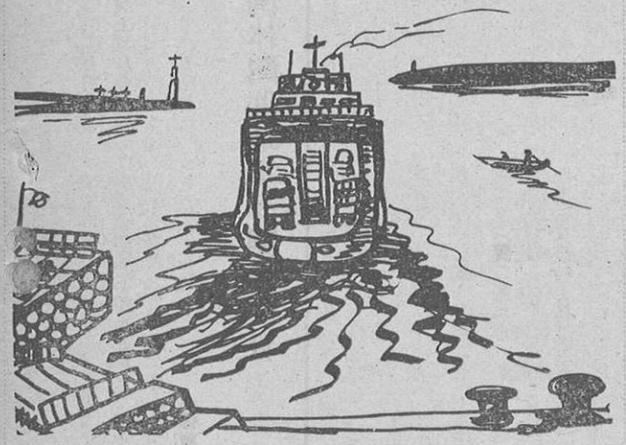
この船でめずらしく感じた事は、特別大きないかりが前後にたくさんおいてあつた事とえんとつの中とピストンでした。

この船はジーゼルエンジンだそうですが、ぼくはこのエンジンは、まだはつきりとわかりませんでしたので、あとで船長さんにおたずねしようと思いましたがとうとうあえませんでした。デツキにでたらつめたい海風がピューピューとふいてきました。

多比良の港付近の海は浅いらしつた所はコーヒ色に、にごつた水が見えました。船のかんじは、とてもよくてスチームはいれてなくとも火鉢がいれてあるのでとてもよかつた。帰りには、かもめが群をなして、飛んでいつた。デツキにでて長崎にさようならをいつたら、雲仙岳も、夕日も、さようならをいつているみたいだつた。

この船をみんなが利用すると、熊本と長崎の産業も発達するだろうと考えながらなごりをおしんで船をおりた。

今日は本当に愉快な一日だつた。



★……吉村保君の描いた有明丸出航のスケツチ

長崎のお客をたくさんのせて

■　船長さんから説明をきく吉村君……

現地ルポ　白梅のある風景

球磨郡下原第一開拓地にて

あかるい第一印象

湯前線免田駅から南へ3キロ、田圃の中の村道を行くとなだらかな坂道が台地へ続く。いわゆる既存農家が点在する中を更に進むと間もなく、煙草乾燥室のついた例の三階風の家が数十戸、不規則な集落をなしている。こゝが下原開拓地だ。

家はほとんど瓦ぶき台地とはいえ一望の平野で坦々たる道をはさんで青麦の茅がのびそろつた畑、葉の落ちた栗の防風林、つなぎつ放しの乳牛、あちこちに梅が五分咲きの清潔な枝をはり、すべてが開拓地の暗さと対照的な明るい風景なのに先ず心がやわらぐ。

功労者清村さん

なにはともあれ農協長の清村宇市さんに会おうと事務所を訪れる。幸い在宅。六十あまりと見える温顔の清村さんと、オガ屑の燃えるストーブを挟んでの一問一答は、血のにじむ十年の苦斗史をポツリポツリと刻みだす。

清村さんは本県甲佐の人、大正六年台湾に渡つて役人生活に入り、昭和十一年屏東の出張所長時代に煙草専業の移民一六五戸を入れて、現地に開拓団をつくつたその道のベテラン。

この煙草移民は九州四国中国の各地から集められたが、成績は上乗で、四、五年のうちに全部自立、以来年ととも好調を続けていた。そこへ思いもかけぬ敗戦そして引揚げ、〃在留三十年帰りはリユック一つに二千円でね〃。と今でこそ清村さんは笑うが、当時の悲痛な気持は想像にかたくない。

〃骨を台湾に〃の決意で出たのだから今更郷里へも帰れないとあつて、同業のうち本県関係者を中心に五十三戸、それに桜島爆発（大正二）の時移つて来た先住の七戸を加えて六十戸が、この下原開拓団をつくつたわけ。（だから七戸だけは一寸はなれたところに一部落をつくつている。）昭和二十二年六月のことだつた。

最高の条件は〃和〃

この開拓団で最高の条件は、いわゆる寄合所帯でなく、清村さんを中心として台湾以来結束した煙草業者の集まりということだ。

裏返せば気心の知れた同士で和の精神に徹している点である。この基盤があつて相互扶助的な協力が生まれ、今日の成果がもたらされたというわけである。

一戸平均の割当は二町歩（2ヘクタール）、地力に差があるので、優劣に応じて不公平のないように配分した。したがつて農地は分散しているが、農道が完備しているしお互い作物の競作も出来るので、結果的にはやはりこの方がよかつたという。

そこで先ず開墾だが、既墾の畑はごく僅かでしかも荒廃しており、大部分は杉松山や篠原、それを殆ど鍬一本で開くのだからその困難は言語に絶した。しかも一方では食う心配があるから暇を見ては出稼ぎもする。もちろん主食はからいもかじやがいも、米の飯などは年に一度か二度。

幸い健康地で病人が少く、マラリヤに悩まされた台湾に比べてこれだけは助かつた。夏は涼しく、冬も最近の厳寒で〇下九度という例外はあるが先ず凌ぎよいといえる。

さて作物だが、これは手なれた煙草を主力に陸稲、甘藷、里芋、落花生、菜種麦、野菜、茶等々多角的に栽培した。煙草は平均二十五アール（二反五セ）昭和二十四年から在来種を植えたが成績不良のため、廿六年からは台湾以来の黄色種に切かえた。始めはこれもいけなかつたが酸性土壌も逐次改善されて好結果を得三十三年度には三十戸で五百万円、一戸平均十七万五ー六千円の収入をあげた。

助かつた托児所

清村さんは入植早々先ず托児所がぜひほしいと思つた。全人口三三〇人、一戸平均五・五人だが、うち子供が三人で稼働力は二人にすぎない。それが子供に手をとられるのでは仕事にならないからだ。

だが住居すら十分でないのにそこまではなかなかだつた。更に急ぐのは精米所陸稲はとつても精白を頼むのでは商買にならないのでこれは二十四年にとうとうつくり上げた二十五年には

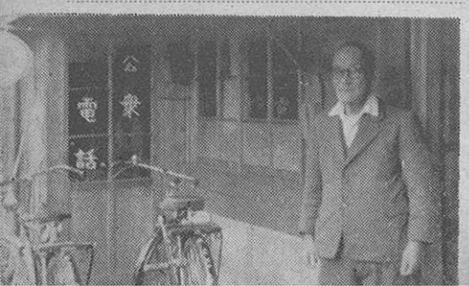
（次頁へ）

開拓地といえば南米か満州、いまの日本でならまず北海道というところを、同じ県内で至るところに散在するのも、戦後風景の目立つたひとつ。

その開拓地も創設以来十年をこえた今日なお、どん底の苦悩をつゞけているところが少くない中に、一戸当りの粗収入二五万円、ゆたかとはいえないまでも人なみの生活に恵まれ文化施設も一通り備えて、明るい将来へ希望の胸を張つている開拓地がある。

球磨郡免田町下原第一農協がそれだ。

さてその実情はどうか。

（写真上は下原風景）

■　事務所前の清村農協長さん